太平洋戦争～戦後教育改革期における樟蔭女子専門学校についての基礎的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: SHIRAKAWA, Tetsurou, SUMITOMO, Motomi メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3891

BY-NC-ND

太平洋戦争～戦後教育改革期における樟蔭女子専門学校についての基礎的研究

学芸学部 国文学科 白川 哲郎
田辺聖子文学館 住友 元美

本研究は、2003年度以来進めてきた、樟蔭学園に遺された資料に関わる筆者らの一連の研究の中で、大阪樟蔭女子大学の直接の前身たる樟蔭女子専門学校(以下、「樟蔭女専」)関係の資料に焦点をあて、その調査および分析に基づき、大正期から第二次世界大戦敗戦後の教育改革期に至る期間の女子高等教育の実態について明らかにすることを目標とした研究の一環をなしている。2012年度は特に、第二次世界大戦後の樟蔭女専に関わる資料の蓄積と分析をさらに進めることを計画した。

本学は、大阪府下にあっては、大阪府立女子大学(2005年大阪府立大学に統合)とともに、1949年、第二次世界大戦後の教育改革にともなって、戦前の女子専門学校から昇格して誕生した、4年制「教養型」女子大学2校のうちの一つである。1945年8月の敗戦から大学へと転換した約4年間の樟蔭女専の軌跡を追うことは、その時期における樟蔭学園の足跡を明らかにすることとどまらず、戦前・戦中から戦後教育改革期における女子高等教育の変遷についても新たな知見をもたらすものとなる。

しかしながら本年度は、これまでの研究過程において、精力的に資料の収集に携わってくれていた研究協力者を欠いたことで、当初計画していたような目的には遠く及ぶことができなかつた。ただ、そうした状況においても、いくつかの成果を見いだすことができた。

先に1928～38年度において、樟蔭女専国文科で実施された中等教員免許に関わる「国語」試験問題を翻刻、検討していた白川(白川他2010)は、新たに1945年度から48年度まで4年間の、漢文を含む「国語」関係試験問題を翻刻し、若干の考察を行った(白川2013)。その検討から、敗戦後から大学への転換に至る時期の中等教員免許「国語」関係の試験問題においては、①基本的な古典作品の読解と関連する知識が問われていたこと、②「国語学」では戦時中とは一線を画するような出題傾向を見いだすことが可能であることなどが浮かび上がってきた。

一方、住友は、まさに本研究が対象としていた時期、樟蔭女専国文科に在学していた田辺聖子氏の手になる作品で昨年度発見した「十七のころ」(住友2012a)、および田辺氏のいくつかの自伝的作品に基づき、田辺氏の〈戦後〉観についての分析を深めた(住友2012b)。その分析から、田辺氏にとっての〈戦後〉というものが、①絶対的価値の喪失に始まり、自己と正対することが必然化された時代であったこと、同時に、②憎悪・驚愕・懐疑・煩悶などの複雑な感情によって迎えられた時代であったことなどを指摘した。こうした指摘は、「女性に対する先駆的な視線」を備えつつ、「庶民の視点に立ち戦後をとらえ」てきた田辺氏とその文学に関する分析と評価を今後さらに深めて行く上で、新たな観点を提示するものとなる。

最後に、2003年度以来継続して行ってきた樟蔭学園の学園資料に関する一連の研究成果をもとに、住友が「森平蔵と樟蔭高等女学校」と題する論稿を、一般向け季刊誌『大阪春秋』に発表したことも付記しておきたい(住友2013)。一連の研究成果をもとに、学外に対する樟蔭学園とその設立者森平蔵に関する知識の普及に寄与しえることができれば、筆者らとしては望外の喜びである。

【文献】

- 白川哲郎・本間悦江・宮本愛実・吉田みなみ「樟蔭女子専門学校国文科『国語』試験問題の翻刻と紹介(1)」(『樟蔭国文学』47、2010年)
白川哲郎「樟蔭女子専門学校国文科『国語』試験問題の翻刻と紹介(2)」(『樟蔭国文学』50、2013年)
住友元美「田辺聖子『十七のころ』(資料紹介)」(『樟蔭国文学』49、2012年a)
住友元美「田辺聖子における〈戦後〉—終戦後の樟蔭時代を中心に—」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』13、2012年b)
住友元美「森平蔵と樟蔭高等女学校」(『大阪春秋』150、2013年)